

修士論文概要

修士論文題目

社会変化のソーシャルワーク

一人びとの交流を促す「場」づくりの可能性

氏名：夏川恵美

研究の目的と方法

本研究は筆者の視点からの気づきを背景としている。まず、ベトナムでの生活経験からの「気づき」である。相互扶助文化が残る開発途上国から社会構造の変化に伴い、人と人とのつながりが希薄化し、個人主義が進んだ日本の地域社会が学ぶべきことは多いのではないだろうか。そして、このような社会において、現代社会における新たな相互扶助システムを構築していく方法が必要ではないだろうか。次に、日本でのソーシャルワーク実践からの気づきである。社会福祉施設でのソーシャルワーク実践において、日々、多くの個別援助を行っており、その実践のなかで、孤立や社会的排除といった地域社会に潜む課題を理解している。その発見された課題について、個別援助のような対人援助で終わらせるのではなく、対人援助の域を超えて、地域社会やそこに暮らす人びとの変容を流すようなアプローチが必要ではないだろうか。

以上のような問題意識を背景として、①現在のソーシャルワークの限界を明確にし、②ソーシャルワークは「人びとの意識や社会変容を促すプロセス」であるという立場から、③対人援助から発して形成された「場」づくりの実践が、地域社会の変容を促すプロセスに結びつくことを明らかにし、④このソーシャルワーク実践のプロセスを「社会変化のソーシャルワーク」として提起する。これが本研究の目的である。

本研究では、まずソーシャルワークの機能と役割について、既存の文献や実践報告から理論的に明らかにした。その上で、現在のソーシャルワークの限界について、他の領域(社会開発、CBR)の議論を検討しながら分析を行った。また、ソーシャルワーク実践の記録に基づき、そこから発見された「場」の機能に着目し、人びとの交流にどのような役割を果たしているのか、仮説的に提示した。次に、日本(千里ニュータウン)とベトナム(ホーチミン市)、2つの「場」づくり(コミュニティ・カフェ)の実践を事例に、当時の記録、報告書類、実践者・参加者へのヒアリング調査による情報収集を行い、「場」の機能について検証し、「場」の形成プロセスと機能、「場」の形成におけるソーシャルワーカーの役割について検証を行った。

論文の構成

第1章 序論

- 第1節 研究の背景
- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成

第2章 ソーシャルワーク概念の検討

- 第1節 ソーシャルワークの定義
- 第2節 伝統的ソーシャルワーク
- 第3節 社会開発視点からのソーシャルワーク

第3章 ソーシャルワークの現状と課題

- 第1節 ソーシャルワークの現状
- 第2節 現在のソーシャルワークの課題

第4章 「場」づくりとソーシャルワーク

- 第1節 地域社会開発におけるソーシャルワーク
- 第2節 交流の場

第5章 「場」づくりの実践例

- 第1節 事例1：大阪・千里ニュータウンのコミュニティカフェ
- 第2節 事例2：ベトナム・ホーチミン市の知的障害のある人が働くカフェ

第3節 「場」の機能の検証

第6章 社会変化のためのソーシャルワーカー

- 第1節 「場」づくりとソーシャルワーク
- 第2節 社会変化のソーシャルワーク

論文の概要

地域社会における相互扶助の意識が薄れてきた現代において、今一度、「人とのつながり」や「人を活かしあう」という意識をもつことが必要とされているのではないだろうか。筆者は相互扶助文化が残るベトナムでの生活経験を通じて、少子高齢化が進む日本の地域社会が開発途上国から学ぶべきことは多いのではないかと考えた。単に過去に戻るのではなく、現代社会における新たな相互扶助システムを構築していく方法が模索されねばならない。

一方、社会的排除や偏見を生み出している現代日本でのソーシャルワーク実践を通じて、「現在のソーシャルワークはいまだ対人援助の域に留まっている。人間の福祉の増進にどれだけ役割を果たしているのか」「対人援助から明らかになった課題は必ず地域社会に根拠があり、結局のところ、地域社会やそこに暮らす人びとの意識変容をもたらすようなアプローチを実践しなければ、社会的排除や孤立、偏見といった個人的諸問題も解決できないのではないか」という、ソーシャルワークへの疑問が浮かんできた。このような問題意識を背景に、本研究では、ソーシャルワーカーが日々の対人援助での経験を無駄にすることなく、その経験を活かすための新たなソーシャルワークの概念を導くことを目的とした。

本研究では、第1章で、研究に至った背景・目的・方法・意義について述べた。

第2章で、ソーシャルワークの既存の定義を調べ、同概念に理論的に検討を加えた。ここでは、ソーシャルワークの定義とソーシャルワークの現状を照らし合わせ、ソーシャルワークの分断化やケースワークへの偏重といった伝統的ソーシャルワークの限界について述べた。

第3章では、ソーシャルワークの現状と課題について、日本の現状から検討を行った。まず、ソーシャルワークの現場に注目し、その機能について批判的に分析し、現在のソーシャルワークの限界を提示した。現状では対人援助を中心に展開する施設におけるソーシャルワークと社会福祉協議会などにおけるコミュニティ志向のソーシャルワークというように、大きく分断されている現状について述べた。また、開発途上国で実践されている社会開発やCBRの取り組みにも触れ、ソーシャルワークの限界を乗り越えるための課題は、社会変容をいかに導くかの方法を開くことにありと提示した。

第4章では、まず、地域社会開発について明確に示し、地域社会における社会的排除について検討した。地域社会開発において、ソーシャルワークはどのような役割を期待できるのかという視点から、個別ケースワークより明らかになる問題を対処療法的に処理するだけのソーシャルワークではなく、社会的排除という地域社会との関係性に関わる問題を解決するためのソーシャルワークのあり方を、理論的に検討した。さらに、人びとが交流する「場」の形成について、筆者の参与観察を基に、地域における交流の「場」が人びとの関係性を変容させる機能をもつことを導いた。そして、このような「場」の機能を仮説的に整理した。

第5章では、日本（大阪・千里ニュータウンのコミュニティカフェ）とベトナム（ベトナム

ム・ホーチミン市の知的障害のある人が働くカフェ) 2つのコミュニティカフェの実践例を取り上げた。ソーシャルワーカーの立場である筆者が実践者として、人びとの交流を促す「場」づくりに関与した実践例である。地域内に設定されたカフェという「場」から生まれた地域住民の動き、変化、発見された課題について、分析を行った。さらに、その分析結果を基に、第4章で提起した「場」の機能について検証した。

第6章では、第5章での「場」づくりの検証結果を踏まえ、ソーシャルワーカーがどのように「場」づくりに関わりうるかをワーカー論として考察した。最後に、第3章で提起した課題へのひとつの解答として、「場」の形成支援を「社会変化のソーシャルワーク」として概念化し、近年、社会福祉協議会などにより実践が進んでいる個別支援から地域支援を総合的に実践するコミュニティソーシャルワークとの比較を行った。最後に、社会変化のソーシャルワークの可能性と課題についてまとめ、将来への提言を述べた。

本研究において、ソーシャルワークの役割として、地域のなかに存在する課題について、人びとが「気づき」の視点をもてるように導く点を挙げている。これは、ソーシャルワークの肝要な援助技術である個別援助技術を介して、日々、人びとと関わりをもつソーシャルワーカーが地域とそこに生活する人びとからさまざまな現状を学び知る経験について、今、そのような問題に関わりをもたないという人に伝えていくということである。そのような役割を実践するために、人びとが交流できる「場」という社会空間を活用し、人びとと社会に存在する課題を結びつける機会を創出していくことが社会変化のソーシャルワークの重要な役割である。

以上